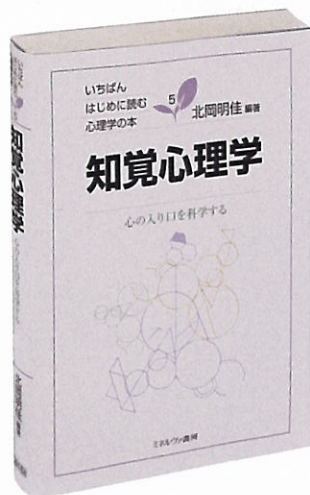


知覚心理学についての 厚みのある アップトウデイトな一冊

評者 鈴木光太郎

知覚心理学
心の入り口を科学する
北岡明佳 編著
A5判 298ページ
ミネルヴァ書房 2940円(税込)



心理学はカメレオンのような学問である。西洋の学問の大半は明治の初期に日本に輸入されたが、心理学は哲学者が中心になって輸入したため、日本では人文科学に位置づけられることになった。しかし、心理学という学問は、人文科学、社会科学、自然科学のどの要素も持っている。国によっては、心理学科が理学部や工学部や医学部のなかに置かれていることもある。内容は変わらずに、まわりの色しだいで見かけが変わる、ちょっと不思議な学問だ。

そのなかでも、知覚の分野は、自然科学的要素が強い。色覚の研究はニュートンに始まり、19世紀に視覚や聴覚の研究の基礎を築いたのはヘルムホルツだということを言うだけで、それ以上の説明は要らないかもしれない。それにディスプレイやデモンストレーションも多用する。典型的な実験科学である。

本書はシリーズ「いちばんはじめに読む心理学の本」の1冊で、第一線で活躍する14人の研究者による知覚心理学の最新の教科書である。オーガナイ

ズしているのは立命館大学の北岡明佳氏。新たな錯視デザインを次から次へと手品のように出してみせる鬼才である。彼の手になる錯視デザインは、一度はどこかで目にしたことがあるかもしれない。その錯視デザインは、海外でも高く評価されている。研究の場からあまり外に出ることのなかった地味な錯視現象をポップなアートやデザインに変身させたのは、彼の功績である。

さて、内容について。ヒトは視覚の動物だとはよく言われるが、実際、日常生活のなかで視覚情報に頼る部分はきわめて大きい。そのため、知覚の解説は、どうしても視覚がメインになる。本書は15章からなり、8章までが視覚をあつかい、知覚の恒常性、錯視現象、色覚、明るさの知覚、運動視、立体視、顔の知覚、眼球運動などが解説されている。9章から11章は、聴覚と嗅覚、さらに多感覚間相互作用があつかわれている。残りの4つの章は、現在ホットなテーマ——バーチャルリアリティ、時間知覚と注意、赤ちゃんの

知覚、美の知覚——をとりあげている。各章には、サマリーとコラム(トピックの簡単な紹介)もついている。図も多く、カラーの口絵が11ページほどある。各章は、その分野についてもっとも精通している研究者が執筆しているので、解説にもぶれや曖昧さがなく、安心して読める。最新の成果も盛り込まれ、内容的に厚みのあるアップトウデイトな1冊に仕上がっている。

通読して思うのは、章ごとに1回ずつ、これらの執筆者の講義をじかに聴いてみたいということである。執筆者の所属が全員異なるので、夢の饗宴ということになるかもしれないが、15回シリーズ(ちょうど2単位の講義になる)で、デモを交えて解説してもらえらるなら、きわめて深い理解が得られるだろう(学会の企画物としてもありそう)。学生だけでなく、専門家のためのリカレント教育にもなるかもしれない。私なら、免許更新の講習よろしく、真っ先に聴きに行くに違いない。

本書は、シリーズものの1冊のためか、装丁がシンプルでおとなしい。内容が知覚心理学なので、アイキャッチな装丁でもよかったのではないかなと思う。ちなみに、英語圏でもっともよく読まれている視覚心理学の教科書に、スノードンらの“Basic Vision: An Introduction to Visual Perception”(Oxford University Press)があるが、この表紙に使われているのは、北岡氏の錯視デザイン、「蛇の回転」である。

知覚の研究領域には、工学系や医学系の研究者も数多くいる。本書は、知覚心理学を勉強してみたい理系の読者にも、お薦めの1冊である。

(すずき・こうたろう：新潟大学)